潁州初別子由二首 其二　蘇軾（潁州にて初めて子由に別る）

熙寧四年（一〇七一）九月、三十六歳の作。通判杭州(杭州の副知事)を命ぜられた蘇軾は、任地杭州（今の浙江省杭州市）に向かう途次、陳州学官の蘇轍を訪ね、同道して潁州(今の安徽省阜陽県)に隠棲している師欧陽脩に謁したのち、その地で別れた。「初」は別離してまもなくであることを意味する。

1 近別不改容　　近き別れは　容を改めず
2 遠別涕沾胸　　遠き別れは　涕胸を沾す
3 咫尺不相見　　咫尺にして相見ざれば
4 實與千里同　　実は千里と同じ
5 人生無離別　　人生　離別無くんば
6 誰知恩愛重　　誰か恩愛の重きを知らん
7 始我來宛丘　　始め　我　宛丘に来るや
8 牽衣舞兒童　　衣を牽きて　児童舞えり
9 便知有此恨　　便ち此の恨み有るを知り
10 留我過秋風　　我を留めて　秋風を過ごさしむ
11 秋風亦已過　　秋風　亦た已に過ぎ
12 別恨終無窮　　別れの恨みは終に窮まり無し
13 問我何年歸　　我に問う「何れの年か帰る」と
14 我言歲在東　　我は言う「歳の東に在るとき」と
15 離合既循環　　離合　既に循環し
16 憂喜迭相攻　　憂喜は迭いに相攻む
17 悟此長太息　　此を悟りて　長太息す
18 我生如飛蓬　　我が生は飛蓬の如し
19 多憂髪早白　　憂い多ければ　髪は早く白からん
20 不見六一翁　　見ずや　六一翁を

【語訳】○**涕沾胸**…沾は霑と同義。ぬらす。潘岳の「悼亡詩」其三に「覚えず　涙胸を霑す」とある。○**咫尺**…ごくわずかな距離。咫は周代の長さの単位で、約十八センチ。○**宛丘**…陳州(今の河南省淮陽県)の異称。宛邱とも書く。蘇轍がその地の学官(教授)の任にあった。○**児童**…蘇轍の子どもたち。○**便**…即の義に近く、すぐにの意。俗語的な言いまわしである。○**此恨**…現在浸っている別離の悲哀をさす。○**歳在東**…歳は太歳　太歳は十二年で天球を西から東へ一巡する歳星（木星)を十二支に位置づけ、その対角にある十二支で呼ぶもの。この詩が作られたのは辛亥の歳で、太歳は亥にある。それが東、すなわち寅に位置するのは、杭州の任期が満了する三年後の甲寅の歳(熙寧七年)である。○**循環**…循る環の意。環は輪の形をした玉製品。初めもなく終わりもなく無限に繰り返すことを言う。○**迭**…かわるがわる。○**飛蓬**…蓬はアカザ科の植物で、砂漠地帯に生え、根を吹きちぎられて、風のままに転びゆく。古来、飛蓬・転蓬に比喩して人生の不安定さが嘆かれた。○**多憂一旬**…魏の文帝(曹丕）の「短歌行」に「人 亦た言える有り、憂いは人をして老いしむと。嗟 我が白髪 生うることの亦た何ぞ早き」とある。○**六一翁**…欧陽脩の号。欧陽脩は、蔵する書物一万巻・金石遺文一千巻・琴一張・碁一局・酒一壺に自らの一老翁を加えて、六一居士と号した。この年、欧陽脩は六十五歳、死の前年であった。

【通訳】別れゆく先が近いと表情さえ変えないのに、遠くへの別れには涙がしとど胸をぬらすのである。別れた距離がたとえわずかでも、顔を合わすことがなければ、千里の別離と異なりはしない。もし人生に別離がなかったら、だれが恩愛の情の大きな価値に気づきえようか。私がここ宛丘(陳州）に着いたとき、(蘇轍の)子どもたちは私の着ものを引っぱっていつまでも騒いだものだった。

（しかしそうしたよろこびの中にあって)はやくも別れのつらさが予知され、「秋風が吹きすぎるまでは」とひきとめてくれた。その秋風もとっくに去ってしまったが、別れのつらさはいつまでも尽きない。私にたずねてくれた、「いつ帰ってくるの」と。私は答えた、「太歳が東にいったら」と。別離と会合とがきわまりなく繰り返すものである以上、(それがもたらす)憂いと喜びもつぎつぎにせめぎあうであろう。これを悟っては大きな溜息がもれる。私の人生はまるで朔風に行くえ定めずもてあそばれる根なし草のようなもの。あまりに悲しんでばかりいると早く白髪になってしまう。ごらん、あの六一翁を。

蘇東坡詩選・小川環樹、山本和義（岩波文庫）より抄出。